

れ、最後まで日中兩國人民の友好と團結を説きつづけた孫文を記念した。これらの事實は、多くの人々にとって、孫文は過去の偉人ではなく、まさに、現代に、生きてゐる。革命家であることをしめしている。それゆゑに孫文研究家は、彼の歴史的位位置ばかりでなく、その思想と行動のなから、われわれは何を學び、何をうけつづべきかという、孫文の現代的意義をも明確にする責務がある。とりわけ、今日のわが國はアジア侵略にのりだそうとしており、それとともに、ますます反中國の風潮がつよまりつつある。この重大な時期に、著者が中國民族の獨立と發展を勝ちとるために全身をなげうって闘ひ、いくたの挫折を経ながらも、ついには日本をはじめとする帝國主義列強の本質をみぬき、これと對決するとともに、人民間の團結を達成する方向に突進していった孫文の思想と行動を、實證的に明らかにされたことは重要な意義がある。著者は最後にこうのべている。「われわれは日本帝國主義が中國民衆の腦裡に刻み込んだ恥ずべき霸道の歴史を顧みて徹底的な悔悟と反省の上に立つて、帝國主義および封建主義の抑壓からの中國民族の解放、さらに全世界の被壓迫民族の解放という先覺者孫文が達成し得ずして終つた目標へ向つて今や着實に前進しつつある中國の據つて立つ革命的基盤とその歴史的必然性を正當に理解し得ないならば、日中兩國の眞の民衆的提携は永久に望むことができないであらう。」

反中國の風潮にあおられて、現代中國を生みだした歴史的社會的條件を無視する皮相な中國理解がはんらんしている現在、孫文を通して、いまいちど中國近代史の苦難にみちた發展過程を考えてみることは、われわれにとってきわめて重要なことである。著者もまた、そのことを念願して、この書を公けにされたにちがいない。本

書は、孫文の研究と題されてはいるが、日本帝國主義中國侵略史の研究という側面をもつとともに、現代中國に脈々として流れている反帝民族解放闘争擁護の立場の歴史的形成をもあきらかにしていることを指摘して筆をおきたい。
(藤田敬一)

The Dynastic Arts of the Kushans.

Rosenfield, John M.

California, University of California Press,
1967. xliv, 377 pp., XVI pls., 167 figs.

著者 J・M・ローゼンフィールド氏は、現在ハーバード大學ファーク美術館東洋美術部研究員である。一九五六―五七年に、イランとインドに旅行し、一九六四年には研究のためしばらく京都に滞在されたことがある。本書は著者がハーバード大學の美術學科で、B・ローランド教授の指導のもとに、一九五五年からはじめた研究の成果である。「クシャンの王朝美術」というタイトルは、けつして「クシャン王朝の美術」のみではない。

一九五三年にアフガニスタンのスルフ・コタルの遺跡でめずらしい白色石灰石の影像の發見があつた (Fig. 120)。正面主義をとるかたい表現の彫刻で、不幸にして頭部が缺損しているが、長い上衣とズボンをつけ、ブーツをはく、いかにも北方人らしい服裝で、これがクシャン人カニシユカ王の像と判斷された。ところが、これにもっとも類似するものが、既に中インドのマトゥラーで發見されている。カニシユカの銘のある肖像である。佛教美術の觀點からい

王 名	カニシュカ紀年
Kanishka	1—23, 41
Vasishka	24, 28
Huvishka	28—60
Vāsudeva	64/7—98

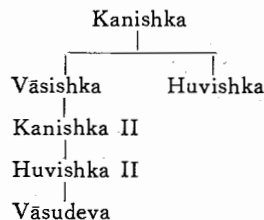
- 第一章 クシヤン帝國の成立
第二章 カニシュカの傳承と王位
第三章 フヴィシュカとクシヤン諸神
第四章 ヴァースデヴァ一世と後繼者
第五章 シヤカとバルチア
第六章 マトゥラーの肖像彫刻
第七章 その他の王像—クシヤンとイラン
第八章 マトゥラー王像の圖像様式
第九章 佛教彫刻におけるクシヤン禮拜者像

ば、西北インドのガンダーラ彫刻とマトゥラー彫刻のあいだには、はつきりした作風のちがいがあつた。マトゥラーのものが古いインドの傳統的手法によつてゐるのに對し、ガンダーラのはより西方の手法でつくられてゐる。それにもかかわらず、この二つのカニシュカ王像のあいだには、佛教彫刻の傳統をこえた表現の類似がある。いまローゼンフィールド氏の目標とするクシヤンの王朝美術の研究も、實にここに意義をみいだしたといつてよい。

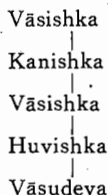
本書の構成は、序章につづいてつぎの九章からなる。

このほかに附録として、(一)カニシュカの年代、(二)カニシュカ舍利容器、(三)マトゥラーにおけるインド・スキタイ王朝に關する銘文、の三篇がつく。

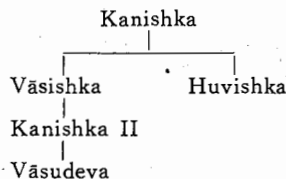
讀みおえて氣づくことは、この書が二つの構成からなつてゐることである。第一章から第五章までと、第六章から第九章



(表 3, Rosenfield 説)



(表 2, R. Ghirshman 説)



(表 1, S. Konow 説)

章までである。前半は主としてクシヤンの歴史的背景の再現に力がそがれてゐる。とりあつた史料も、圖像よりむしろ紀年銘文と貨幣とである。

後半はクシヤンの肖像をとりあげ、インドあるいは西アジアの美術との關連を考えながらその重要性をのべる。

ローゼンフィールド氏の著述の形式は、こまかい項目による叙述で、ときとして一ページに二つの項目がみられることもめずらしくなく、それぞれを從來の研究の要約の形で記述する。ここでは各項目について細かに紹介していくわけにはゆかないので、著者が全體を通じてよりどころにしたとおもえる、一つの問題をとりあげてみよう。

それはクシヤン史のなにかくされた大きな歴史事件を想定することである。カニシュカの死後、フヴィシュカの統治初年にいたる期間に、帝國内部に大きな混亂があつたと考えることである。

カニシュカ以後ヴァースデヴァにいたるクシヤンの諸王については、カニシュカ即位元年にはじまる、いわゆる

カニシユカ紀年をもつ銘文が各地で発見されている。これを整理してみると前の表のようになる。ヴァーシシユカの貨幣はいまだ発見されたことがないが、二四年と二八年のはっきりした銘文が存在するので、一應カニシユカとフヴィシユカの統治のあいだにおく。しかしもう一つ、やっかいな銘文がある。Ara 銘文カニシユカ四一年である。このカニシユカははじめのカニシユカとヴァーシシユカとへだてられ、しかもフヴィシユカの統治期間と重複する。銘文はさらにこのカニシユカの父がヴァーシシユカであるという。そこで従来の學者は、四一年のカニシユカをカニシユカ二世とみとめてつぎの統治表をつくる(表1)。フヴィシユカの統治と重複する點は、なんらかの形で(共同統治、王位繼承争い)みとめようとする。R・ギルシュマン氏は二四年と二八年の銘文をもつヴァーシシユカとAra 銘文のヴァーシシユカを同一人とみないので、つぎのような統治表になる(表2)。ローゼンフィールド氏がA・Lバシャム氏の意見にもとづいて紹介するものは、もつと複雑になる。フヴィシユカを二人想定する(表3)。いずれにしても、フヴィシユカの完全な統治までには、ヴァーシシユカやカニシユカ二世といったあまり知られぬ王の統治があり、クシヤンの王權に不安定な時期のあったことをおもわせる。

ローゼンフィールド氏はここでもう一つウェスターン・クシャトラバの碑文(Junagadh rock inscription)を重視する。この碑文によると、シヤカ紀年七二年(A.D. 一五〇年)をあまりさかのぼらない時期に、インドのウジャインの支配者 Rudradaman が勢力をもち、クシヤン王家と緊密な關係にあったシンド、パンジャープの Yaudheyas を敗北させ、マトゥラーとガンダーラをむすぶクシ

ヤンの主軸をおかしたことが知られる。ローゼンフィールド氏は、おそらくこの事件がカニシユカの死後にくる、クシヤン國內の混亂に乗じておこなわれたものとみる。もしこれが正しいとすれば、われわれはクシヤン國內の混亂の時期をA.D. 一五〇年のすこし前と考えることができる。

ではこのような歴史事件が存在したとすれば、クシヤンの王朝美術にどのような影響をおよぼしているか。その一つはフヴィシユカ貨幣である。フヴィシユカはクシヤン諸王のなかでも統治年数がながいだけに、発見される貨幣の数もいちばん多い。最近ウィーンのR・ゲブル教授によってクシヤン貨幣の體系的研究が發表され、ローゼンフィールド氏も全般にわたって参照している。(Göbl, R. Die Münzprägung der Kusān von Vima Kadphises bis Bahram IV. 1957)

ゲブル氏の分析によると、フヴィシユカの金貨は三つのタイプに分類することができる。打刻の順序からすると、貨幣の王像は、(一)老人の肖像 (二)若い肖像 (三)壯年の肖像、の順となり、時代錯誤を感じないわけにゆかない。ローゼンフィールド氏はこの時代錯誤的現象を、あえて二人のフヴィシユカの假説にむすびつけようとして、フヴィシユカ統治初年の安定しない政局が、貨幣にこのような不規則性を與えたものとする。

ついでマトゥラーのマト神殿のある時期の荒廢も、この事件に關係づける。マトゥラーの遺跡で十分調査されたものは少ないが、マトの神殿は既にのべたカニシユカ王の肖像をふくむ一連のクシヤン支配者の肖像が発見されたところである。この神殿から出土した銘文の一つによると、この神殿 devakula はフヴィシユカ

(Maharaja Rajatrata Devaputra) の祖父(ヴィー?)にかかわるもので、その後荒廢にまかせてあったのをフヴィシユカが修理させたという。この銘文をもつフヴィシユカの肖像(散佚)は、この神殿の新たな修復のさいに奉納されたものであろう。この銘文には紀年が記されていないが、フヴィシユカの稱號は四〇年をさかいに、それ以前の Maharaja Devaputra の稱號に Rajatrata の稱號をつけるようになってくるので、この銘文もフヴィシユカ四〇年か、そのこのものと考えられる。この神殿の修復時期もおよそ推測がつく。

同様な現象はヒンドゥクシユの北のスルフ・コタルの遺跡にもおこっている。スルフ・コタルの銘文によると、この神殿(Bagojago)はカニシユカによって建立され、そのあと荒廢したままになっていた。銘文の三一年に高官の Nokonzoko というものが、ここへきて修理をおこなったという。

これはさきのマートの神殿とおそらく同じ原因で、同じ時期に荒廢したのにちががなく、カニシユカの死後におこったクシヤン國內の混亂のさい、神殿がしばらく顧みられなかったためであると考ええる。

ローゼンフィールド氏が附録(一)カニシユカの年代で提案する新しいカニシユカ紀元説(A.D. 一一〇年—一一五年)も、この考えにもとづいている。既に述べたように A.D. 一五〇年ころの Rudataman の侵攻がクシヤンの混亂期(カニシユカ紀年二四年—三〇年)とむすびつくるとすれば、カニシユカ紀年のはじめはおのずから見當がつく。著者はこれを別の方面からうらづける。それは二つの中國史料で、著者は原文をひいていないが、私の手元にあるもの

から引用してみるとつぎのようになる。

『大唐西域記』卷一 迦畢試國

昔健駄邏國迦賦色迦王。威被隣國。化治遠方。治兵廣地。至葱嶺東。河西蕃維。畏威送質。迦賦色迦王既得質子。特加禮命。

『後漢書』西域傳 疏勒國

安帝元初中。疏勒王安國以舅臣警有罪。徙於月氏。月氏王親愛之。玄奘は迦畢試國のある小乗の寺で、昔カニシユカのもとに送られてきた人質の話を書いたのである。ローゼンフィールドは『後漢書』疏勒の記事が、この人質の話とむすびつくものと考え、無名の月氏王がカニシユカであるなら、カニシユカは「元初中」に在位していたことになる。以上のことから著者はカニシユカの即位元年を A.D. 一一〇年から一一五年のあいだにおくのである。

しかし、ローゼンフィールド氏の引用に二つの誤りがある。著者は『後漢書』の記事をつぎのように譯出した。

King An-Kuo of Kashgar (A.D. 107—113) sent his maternal uncle and retainers to the king of the Yüeh-chih and they were well treated. (*Hou Han-shu* 118, 136)

安帝の「元初中」は A.D. 一〇七—一三三年ではなくて、一一四—一一九年である。一〇七—一三三年は、その前の年號「永初」の年である。つぎに his maternal uncle and retainers とするのは「舅臣」の譯であらうか。この「臣」は、安國王の舅である臣警の名前の一部であって、家臣 retainers の意味ではない。

著者が参照しているのはすの Ed. シャンヌ (*Yüang Pao*, 1907, p. 265) は正しい佛譯をつけているのにどうしたわけであらうか。

カニシユカ紀元については、一九六〇年四月二〇日—一二日にロ

ンドン大學で國際學會 (Conference on the Date of Kanishka) がひらかれた。ローゼンフィールド氏はこれに出席しなかったが、會議の要旨をしるしたペーパーを、ペナレス大學教授の A・K・ナライン氏から送られて參考にできたとのべている。

この會議の詳しい成果がまもなく出版されるときいているが、私としては中國史書の「波調」(A.D. 二三〇年、朝貢)が、ヴァースデヴァにあたることにともともかなうギルシュマン氏の一四四年紀元説以外に、あまり賛成できるものがないようにおもふ。ローゼンフィールド氏の紀元なら、當然この「波調」を、クシャンがヒンドゥクシュ南北に分裂してからのヴァースデヴァ二世あるいは三世にあてることになるが、中國に朝貢する勢力をもったヴァースデヴァは、盛期クシャンのヴァースデヴァ(一世)以外に考えられないであらう。歴史上の問題はこのくらいにして、つぎに本書の後半の内容を紹介してみたい。

第六、七章。さて既にふれたマートの神殿やスルフ・コタルの神殿がいかなる性格をもつものであるか。またそこにおさめられたクシャンの支配者の肖像がいかなる役割をはたすものであるかが、ここで検討される。「もし建物が生ヴァ神あるいは佛教の寺院であるなら、支配者の肖像は禮拜者の役割としてそこにおかれた。もし帝王禮拜の場所であるなら、神像と王像とが混在するのは、別の意味つまり王とその領土に對して神の恩寵をねがうことと、王と神とを同等視することである」(p.150)。ではクシャンの支配者像はどちらに考えられるか。マートの神殿もスルフ・コタル神殿もおそらく支配者禮拜の場所であらう。ただ著者はスルフ・コタルの神殿の性格については、H・フンバッハの銘文の新解釋もあるので、そ

れ以上の斷定をやつてゐる。(Humbach, Helmut: Die Kanishka-Inscription von Surkh-Kotal, 1960)。つぎで著者は西アジア各地の神殿をクシャンの神殿と比較しながらのべる。Shami, Nimrud Dagh, Kahi-Khwaja, Toprak kala in Khwarezm が帝王崇拜のためにつくられたものとし、パルチアの Hatra は古いメソポタミアの傳統をうけて、支配者の肖像が神への獻身の永遠のあかしとして神殿に据えられたものであるとのべる。

第八章。インドの美術はマウリア時代以來宗教の奉仕のもとにおかれることになり、肖像をつくるという基本的動機を失なつてしまふ。佛教は人間がその個人的なことに中心をおくことの價値をひくめたのである。クシャン時代になつてマトゥラーに肖像が多くつくられるようになるのは、外來の文化、外來の美術原則がインドにもちこまれたのであつて、土着の工匠がこれに妥協を示したことを意味する。異國人の服裝は丹念にうつされるが個性の表現は乏しい。

第九章。著者はさいごに佛教彫刻にみられるインド・スキタイの服裝をつけたクシャン人禮拜者像に注意をむける。そこにえがかれる多くのクシャン人禮拜者は、とりもなおさず精神的にも經濟的にも佛教美術の力づよいパトロンであつたことをものがたる。そこでさらに詳しくクシャン人禮拜者の對象となつてゐる尊像をしらべていくと、その信仰様式が變化してきたことに氣づく。禮拜の對象のはとんどが彌勒菩薩あるいは彌勒をともなつた釋迦佛であり、他の菩薩である。西曆二、三世紀になると、クシャン領内では、釋迦牟尼の生涯に對する重視がしだいに少なくなつて、大乘教的な淨土や菩薩の考え、單純な信仰とおとしての救済が、俗人の宗教心をよりとやすく満すようになってきたのである。著者はそこで菩薩信仰をと

りあげる。まず將來佛である彌勒思想が外來の思想に影響されている、という考えを紹介する。「イラン人のあいだでは the Avestic leader of the Pure Ones であるサオシュヤントの信仰がある。それは創造の終極において邪惡を屈服させ、ゾロアストラ教の眞髓にある善と惡との大闘争を終らせるものである。サオシュヤントは世界を復活させるであろう。そののちはすべてのものが老いず、死せず、朽ちず、つねに生命を保持し、繁殖し、ついには死者がよみがえり、不死が到來する。佛教における Maitreya 彌勒の傳説には、未來の完成というつよい考えがあるほか、附隨的なこまかさがあり、それは西方、とくにイランに類似をもつようにみえる。」といい、同じく「西方の影響は西方淨土の主 Anītabha 阿彌陀とその二人の菩薩脇侍、すなわち Avalokitesvara 觀音と Mañashāmaprapta 大勢至の信仰にもみられる。Marie-Thérèse de Mallmann は詳細にわたりつぎの假説をうちたてた。これらの神は無際時の人格化である Mithraic Zurvan ゼルヴン神と Lord of Light and Wisdom 光明と智慧の主と Possessor of Great Power 偉力の持主とを採用したものである(p.288)」とのべる。私もかつて彌勒菩薩の誕生を考えてみたことがある。佛典では、彌勒は定光佛や過去七佛のあとにひきつづいて生みだされる。ちょうど世代的系列にそって出現した佛である。一たび過去佛が生みだされれば、將來の佛も容易に生みだされる基盤であると考えた。しかしよく考えてみると、釋迦佛の背景を莊嚴するためにつくりだされた多數の過去佛と、救世主としての將來佛とのあいだには大きなへだたりがある。この間隙をうずめるには、やはり西方のメシア思想の存在を考えなくてはならぬのであろうか。

(*) サオシュヤントを著者は Šaoshyant とかくが、Šaoshyant としなければならぬ。Sav / su 「利益する」の未來分詞の語形で、中期ペルシア語では Šōšyans, Šōšāns となる。)

ローゼンフィールド氏は彌勒菩薩について、もう一つ注目すべき發言をしている。釋迦がクシャトリアの出身であるのに對し、彌勒はバラモンの家柄に生れている。これは佛教がバラモンの精神的權威とかからの支持とを必要とし、その要請の多くが將來佛の彌勒に集中されたためであろうという(p.233)。もし彌勒の誕生に西方のメシア思想とインド國內のバラモンの關與が考えられるとすれば、興味ある問題といわねばならない。

佛教彫刻のなかで彌勒菩薩像とならんで、大きな點でも數の上でもおとらないもう一つの菩薩像がある。ローゼンフィールド氏はこのタイプの菩薩を identity is uncertain という(p.207)。具體的な菩薩でなしに uttama Bodhisattva (The Bodhisattva par excellence) あるいは Bodhisattva Mahasatta (大衆教典でいう利他主義行爲の人格化) と考えようとする。しかし私の考えでは、この菩薩はもつと具體的なものである。著者がこの菩薩像の例として圖示する fig. 50 のマトゥラーの浮彫(楣)について、「不幸にして浮彫の端が缺けているので、その full pantheon を決定することが不可能である」とのべているが(p.239)、この浮彫が過去七佛と彌勒菩薩を並坐させた主題であることは容易に氣づこう。ただ過去七佛のうちはじめの四佛が缺損している。右端の八番目のものが水瓶をもった彌勒菩薩で、となりの七番目の問題の菩薩は釋迦牟尼である。一般に過去七佛・彌勒並列像では、釋迦は他の過去六佛とともに佛の姿であらわされるのが普通であるが、ここでは菩薩の

姿で表現されている。その姿は彌勒菩薩の質素な束髪と對照的に、寶石飾りのついた王冠をつけてあらわされている。ローゼンフィールド氏のことはをかりていえば、釋迦がクシャトリア出身にふさわしい王者の姿で表現されているのである。これを釋迦牟尼菩薩とよんでよいだろう。釋迦牟尼が佛の姿とともに菩薩の姿でも禮拜されていたのである。(以下拙稿、ガンダーラ佛教美術の展開、『史林』五〇—を参照されたい。)

以上で私の讀後感をおえるが、はじめにのべたように著者の記述はこまかな項目にわけており、それぞれが巧みにつながれているにもかかわらず、うっかりすると前後の連絡を失ってしまう。ここで紹介したものはなるだけ一貫する問題をえらんだので、他の多くの興味ある記述を省かざるをえなかった。各項目がクشان史、美術史のあらゆる問題を知るうえに役立つものであり、讀者が必要に応じて重點的によんでもかまわないものであろう。それぞれに詳しい註と、豊富な文獻が用意されている。ローゼンフィールド氏は、しめくくりとして Conclusion の章をもうけていないが、結論も讀者にゆだねられたのかもしれない。

從來のクشان美術の研究は佛教美術を主題とした。とくにガンダーラ佛教美術にみられるギリシアあるいはローマ風の彫刻は、西

洋人の強い關心をひくことになり、多くの學者によって研究され、多くの問題が解決されてきた。ガンダーラ美術の成立時期は、ほぼクشان王朝の時期におちついた。ガンダーラ彫刻にみられる西方的要素については、ヘレニズム美術とするかローマ美術とするかが問題であった。本書に序文をよせるローランド教授は、早くからローマ美術の影響を主張している。序文のなかにおいても、サフリ・パフール出土の供養者像 (Fig. 66) の表情が、いかにローマ美術の Gallienus から Constantine 時代にかけての肖像にちかいかを指摘している (p. xii)。ローゼンフィールド氏がなぜクشان美術に佛教美術という主題をさけて、王朝美術をとりあげたのか。王朝美術は佛教美術よりむしろはつきりと、その美術系統をたどることができからである。ローゼンフィールド氏があつかう支配者の肖像は、ほとんどバルチア・イランの表現様式をとっている。最近のガンダーラ美術の研究も、ヘレニズム美術、ローマ美術のほかにグレコ・イラン美術あるいはバルチア・イラン美術の存在を強調する傾向にある。ではこの王朝美術と佛教美術の關係はどうであろうか。これは讀者の興味ある疑問であるとともに、著者ローゼンフィールド氏自身が、ふたたびこの問題を論ぜられんことをねがって筆をおきたい。

(小谷 仲男)